

共学

# 芝国際中学校・高等学校

JR「田町」駅から北に数分歩くと、格子の校舎が見えてくる。北側の正門辺りはまだ工事が続いているが、南側の緑地沿いに開放的なカフェがあって、高級オフィスビルと見違えるほどだ。

我が国有数のビジネス街にあり、実業界へのパイプも多いので、英語や国際教育に熱心な雰囲気は当然だ。海外研修も一九八〇年から実施しているし、留学生を受け入れる経験も豊富である。

創立一二〇周年を迎える今年、校名を「芝国際中学校・高等学校」

と変更し、共学化した。さらには校舎内にインターナショナルスクールが入居した。国籍や言語、価値観などが異なる子どもたちとの交流が、常時可能である。

## 進化を止めない学校

教育理念の「人の中なる人となれ」は創立時のころより変わらな

い。「いちばんは生徒一人ひとりの幸せです。時代によって必要とされるもの、生き抜く力を身につけることです。」

そのために必要なものを用意しています。3Dプリンター、ロケット、ロボット、AIなどです。そして、中・高六年あるいは三年の間に一度は海外で暮らしてみたい、三週間でも一年でも。もし将来なくなる職業があ



サイエンスラボでの実験

るといふのなら、自分で職業を創ったり起業したりできるようにな

ってほしいのです」世界の状況の変化を先取りし、つねに最先端を目指して進化を続けてきた自信がうかがえる。ともすると先行しすぎて保護者の理解が得にくいリスクもあるが、基本も忘れていない。

「もちろん、国内・海外を問わず大学受験にも対応しますよ。た

だし、大学側も一人ひとりの生徒が『どれだけ主体的に物事に取り組んできたか』を評価するようになっていきますので、本校の生徒には非常に有利になってきています」と

山崎達雄校長は笑う。

## グローバルな学びと創造の実践に特化

山崎校長は十五年余り、帰国生受け入れ教育に携わってきた。

「これまで海外子女教育振興財団の海外巡回説明会・相談会に参加させてもらうなどお世話になってきました。海外を巡っていて、そこで感じていたことは二つ。

まず子どもも保護者もじつに多様であり、それが尊重されていることの深さを感じました。バラバラなものが融合したときには、ほんとうに大きな力になるんですね。それと、日本の教育に十分に触

られない人が多くいて、それでもそうした環境を乗り越えてこられている……そんなかたちにも機会があつてよいはず」

だから十数年間、世界中どこに住んでいても受験を可能にしてきた。

12 階建て最新の校舎



所在地：〒108-0014 東京都港区芝4-1-30  
 TEL：03-5427-0666 / Fax：03-3451-0902  
 URL：https://www.shiba-kokusai.ed.jp  
 交通：JR山手線・京浜東北線「田町」駅より徒歩5分。または都営浅草線・三田線「三田」駅より徒歩2分  
 生徒数：中学校（1年生）=男子65人 女子70人  
 高等学校（1年生）=男子123人 女子141人  
 帰国生数：中学校 =男子27人、女子34人  
 高等学校=男子22人、女子27人  
 教職員数：専任 53人（うち外国人 9人）  
 非常勤 25人（うち外国人2人）  
 帰国生入試の出願資格：  
 海外生活経験1年以上、帰国後3年以内。

「中学校の国際コースは英検二級相当の生徒が対象です。ネイティブスピーカーと日本人のダブル担任制で、クラス運営は英語で行われます。授業については、英語以外に、数学・理科・社会も英語で行われます。いずれも専門性を持ったネイティブスピーカーの教員が担当します。本科コース（三学級）にも帰国生はいますが、四科（算・国・理・社）の入試を突破した優秀な生徒たちです。一人ひとりの可能性を拡張させる新しい学力を養いながら、世界標準の学びで、多様な価値観を持つ人々と共に、自分の夢を実現

できる力を獲得していつてもらいたいのです」と熱く語る。

「やってみなはれ」と言うのが口癖だそうです。

「先生たちには生徒にいろんなことをやらせてほしいと考えています。幸い、私が『挑戦、行動、突破、そして貢献』としつこく言わなくても、それ以上に動いてくれます」とのこと。

## やりたいことに挑戦できる学校

中一の帰国生ふたりに話を聞いた。小三から三年半、アメリカのサンフランシスコ郊外で現地校に通ったAさんは、

帰国生入試で合格したそうだ。

「帰国子女を受け入れているので安心なのと、新校舎ができること……昨年八月に工事現場を見せてもらえました。それと、つくりたい部活がつかれると言われたので、eスポーツをやりたいと思いました」と

言う。

六歳でシンガポールに渡航し、二年間インターナショナルスクールに通ったあと、UWCで学んだBさんは、「芝国際は塾の先生に勧められました。日本語の敬語は難しいと思っていたので、一期生だから先輩がいらないのはちょうどよいと（笑）。それと、宇宙ロケットを発射できると聞いて、やったあとと思った」と話してくれた。

入学後の感想を聞くと、「アメリカの現地校は平屋だったので、階段を上り下りして教室を移動することに……（笑）。でも現地校には音楽室がなかったので、いろんな楽器が置いてあってうれしいです。それに現地校の体育館は小さかったけど、ここには立派なのがある（笑）」とAさん。

「国際クラス生なので、英語と日本語とミックスで話しています。合宿に持っていくものの中に『コミュニ



ネイティブスピーカーによる授業（高校）

ニケーションの役に立つものなら何でもOK」とあったのには、驚きました」とBさん。

Bさんはまた「飛行機のパイロットになるのが夢だったけど、技術の進歩で将来はなくなりそう（笑）。だから宇宙飛行士を目指したい。それと、自分で仕事を創る。たとえば民間人でも宇宙旅行ができるように」と語る。

Aさんは「私は初対面の人が苦手だったけど、この学校ではコミュニケーション能力を高めようとしてくれるので、苦意識がなくなってきました」と言う。

仲間と話し合いながら考えを進めている様子が目に浮かぶ。

（取材・文 小山和智）